

常射之卷

一

一貫流射術常射之卷一

目錄

弓之部

的弓

陰陽弓 二所藤 三所藤 節卷

遠弓

篠張弓

指矢弓

藤放弓

弓製 丸村 角村 紫檀 彌はす 銀杏 弭握 太

握卷様
葦裁様

弓張様

弓踏直

射手村

遠路弓持様

弓包様

弓疵見

鰯にび起付様

鰯製

早鰯

弦之部

的弦

弦製

晒弦

天崩煉樣

弦喰濕

一貫流射術常射之卷一

弓之部

的弓

遺稿曰古昔ハ的弓ニモ塗弓ヲ用タリ則延喜式

ニ凡武官人等皆用塗弓スリユミヲ其正月十七日大射ハ節文

官亦同トアル文章ヲ以テ大古ハ的射ニ塗弓ヲ

用ユルヲ禮トシタレヲ可知何頃ツヨリカハ塗弓

ヲ軍弓トシ歩射ノ的射ニハ白木ノ類ヲ以テ禮

儀トス則射御拾遺抄應來二十九年小笠原備前
守持長同興元連名有之

ニ白木そば白木むらこきこれらは的弓に用へ

し射御持長記 應来廿九年三月一日小笠原民部
少輔持長同備前入道真元トアリ

に的弓の事白木そば白木むらこき是等すへきを可用

意岡本記 天文十三年二月三日岡
本義濃守緑持ト奥書有 到的弓と人の

所望の時しらきそばしら木むらこきを出すへ

し鬪くじ的聞書 小笠原持長持清政広
元清元長等説集記之 到的挟物草鹿

丸物などは白木そば白木むらこきなどにて射

べし自然白木の弓のなき時はぬり弓にて射へ

き心得あり 祐方云心得アリトハ不レ得レ止塗弓ニ
テ的ヲ射ル時ハ白弦ヲカケテ射ナ

リ若シ白弦モノナケレハ上下ノ弦輪ヲ白キ紙ニ
テ卷キテ射ナリ塗弓ニテ射サル心ナリ是レ小

笠原家の出的出張記 来録六年正月十日。
伊勢貞久ノ記ナリ 到的弓の

事白木そば白木むらこき成へし弓馬聞書 元龜元年

七月廿一日堤右京亮右宗記之 到的弓の事白木そば白木むら

こきたるへし上賢抄 上原豊前守賢家記之永正九申七月日國家判有之

到的弓などのふしをきしたるを糸にて巻てう

るしなとさす事あるへからす法量物異本 文安三年

七月廿八日沙弥淨元ノ記也 到的なと射時は白木そば白木村

こきにて射へし弓法私書 年月記者不詳小笠原ノ古書 に白木

そば白木村こきなとは的弓にも用る也と云云 うんぬん

此等ノ書ニ見エタル攸ハ足利家代小笠原家ノ そばむらこき

掟ナリ思フニ白木側白村刮ノ類ヲ以テ的弓ト

花押

定メタルハ足利殿ノ頃小笠原家ヨリ白木ヲ的

弓塗弓ヲ軍弓ト其分ヲ付タルナランカ又八張

弓ト云モノ出来キ其八張弓ノ第二ノ蛇形弓ト

名称セルモノヲ的弓ノ本式ナト俗称セリサレ

此蛇形弓ともニ祐方云蛇形弓ト云モノ、圖ヲ見ル

ル弓ニテ名称ヨト云モノハ予あるいハ短學学ナレハ古

書ニ所見セス異様ニシタ迄也一貫云茲ニ古書ト云ハ足利家ヨ

漸ようやク三議一統小笠原長秀ノ記也安齋先生ノ説

書ニシテ當家弓法集ト云フ書ナリ此書ノ二八

張弓ノ内ニ云ヘル太平弓ノ名ハ見ヘタレとも此蛇

序文ト三議一統ノ號トハ後人ノ偽作ナリ

書ニシテ當家弓法集ト云フ書ナリ此書ノ

漸ク三議一統ハ鹿花院殿ノ時代ノ

書ニシテ當家弓法集ト云フ書ナリ此書ノ

序文ト三議一統ノ號トハ後人ノ偽作ナリ

張弓ノ内ニ云ヘル太平弓ノ名ハ見ヘタレ

此蛇

形弓ノ名又此弓ヲ的射ル弓ノ本式ト云フこと 叟モ
不見元来本式ト云フ事ハ私ニ定ル叟ニハアル

ヘカラス小笠原家ハ足利將軍家ノ弓馬ノ諸禮礼

つかさどら

ヲ主レタル家柄ニテ此家ヨリ定ラレタル作法

ハ足利家ノ法式ナリサレハ小笠原家ヨリ定タ

ル叟ナラテハ本式何ノ式トハ云ヘカラサル義

ナリ蛇形弓ヲ以テ的弓ノ本式トシタル叟家柄

ノ古書ニ曾かっテ見ヘス疑ヘクモ非ス足利家代ヨリ

後世ノ定ニテ用ヘカタキ妄説ナリ猶なお近キ世ヨ

リ側黒側溜夏木四方竹此等ノ弓温故ニ出ス見合ヘシ ナトノ

類ヲ的射ニモ用ヘタレハ故實ハトモアレ其時
變^変ニ應^応シテ禮射ニハ兔角^{とにかく}其禮義ヲ失フヘカラ
ス能々思惟アルヘシ

陰陽弓 二所藤三所藤節卷

遺稿曰陰陽弓ト云モノ八張弓ノ内ノ第六目ニ
見ヘタルニ所藤ノ弓ナリ陰陽弓ト云ヘル名目
古軍記古物語ニ不見當ニ所藤ト云ヘル名呼ハ
古軍記等ニ見ヘタリ則異本保元物語ニ二所藤
ノ弓持^{安藝判官基盛}ニ所藤ノ弓持^{中務少輔重盛}テ
弓持^{山田小三郎惟行}テ 異本平治物語ニ二所藤ノ弓持

中宮太夫
進朝長
源平盛衰記ニ二所藤ノ弓ヲ持熊谷次實

同記和註ニ二所藤ノ弓ノ真中取畠山庄司義經

記ニ二所藤ノ弓ノ真中取テ加和久曾我物語ニ羅法眼

二所藤ノ弓ノ真中取り曾我五郎時宗異本太平記ニ二

所藤ノ弓ノ銀ノツク打タルヲ十文字ニ握テ大塔

宮二所藤ノ弓ノ握太ナル本間孫四郎重氏二所藤ノ大

弓大森彦七盛長ナト見ヘタリ此ニ二所藤ニ陰陽弓ト云

名称ヲ置タルハ後シンノ偽作ニテ藤ノ巻様ハ

二所藤ナリ師家大口子積ノ弓書祐方云竹林二派ノ書ナリ

モ内竹ノ節ヲ挟テ二ツ宛重テ巻タルトアリハ

*1

*1 宛：ずつ

張弓ノ圖図ニモ前竹ヲ挟テ卷タルト見ヘテ握ノ

下藤数ニツ宛重テ二段握ヨリ上かみニツ宛重テ

三段以上五段ニシテ十卷ナリ逸見ノ弓書遠藤保武

カ武器普録ニ付属ノ書ニ出タル攸ところモ異ナラス實用ニハ外

竹ノ節ヲモ卷ヲ可トスヘシ又師家ノ書ニ白木

ノ弓ニテモ側黒ノ弓ニテモ側溜ノ弓ニテモ或

ハ側白ニテモトアリ此或ハノ字ヲ入タルハ稀

ニハト云心ナリ何様ニ所宛卷タルヲ陰陽ノ兩両

儀ニ譬喩シテ呼ヘル名ナリ又此弓ヲ持テ射ル

所逸見ノ書ニ婚禮産夜ノ墓目流鏑馬等やぶひめニ用ル

弓ナリトアレハ賀儀神事等ニ用ル弓ナリ逸見
ハ小笠原ト兄弟ノ家ナレハ是モ小笠原家ニテ
定タル叟ナランカサレト小笠原家ノ書ニハ此
事不見當師家ノ書ニハ是ヲ可射トキハ祝儀的
ナルヘシ祝儀的など杯ト云叟ハ幼少ノ貴人杯初テ
的ノ興行亦ハ若君誕生ノイハイナトニ的興行
在之ハ此弓ニテ可勤也其外此陰陽弓ハ可用品
アレト畧之的前可用傳伝迄までヲ記侍也ト見ヘタリ
可用品トハ逸見ノ書ニ出タル類ノ事ヲ子細ア
ル様ニ書成シタルモノナリ其證拠嬢ニハ的前ニ

伝まで

可用傳迄ハ記シ侍トアルニテ婚禮産夜ノ墓目

やぶらあ

流鏑馬等ニ用ル事ヲ書サルニテ可知又此弓前

入

ニ述タル如ク古ヘ戦場ニモ用タルニ所藤ノ弓

ナレハ戦場ニ用ルト云々力但シ戦場ニ用ルニ

うるし

ハ漆ヲ以テ布ヲ着セ或ハ芋からむしヲ漆卷ニシ塗弓ニ

ツ

仕立テタル上ヲ二宛節せぼめヲ狭テ卷タルヲ全利ト

ス又此ニ所藤ヲ節卷ノ弓トモ云ナリ節卷ノ弓ノ見ヘタ

ルハ参考保元物語ニ八郎御曹司為朝宇野七郎新治等所持之参考平治物語ニ左馬頭義朝持給

也所節卷ノ一種ニモ節ノ真上ト其上下ヲ挟テ卷

タルモアリ是ヲ軍記ニ三所藤ト云参考保元物ニ伊勢六三

所藤ノ弓持源平盛衰記ニ勅勅使川原四郎有則ハ
三所藤ノ弓ノ中取テ参考太平記ニ名越尾張守
高家ハ三所藤はかり又節ノ上計少シ宛一段キリニ卷
ノ大弓持ト有

シモアリ二所藤モ三所藤モ一段切ニ卷タルモ

僉みな節卷ノ一種類ナレト取分テ云則ハ二所藤三

所藤ト云一段切ニ節ノ上ヲ卷タルヲ節卷ト而

己呼ナリ此一段切ニ卷タルニ長ク卷續テ或ハ
内竹ノ節ニ倣ならヒ或ハ外竹ノ節ニ順テ
一段切ニ長ク卷タルハ段重藤ト称スルナリ是
モ節ノ上ヨリ卷タレトモ節卷トハ唱ヘカラス

或ハ岡本記ニふし卷の弓は前ぶし外ぶしとも
に卷へし前ぶしはかり人のまくはわろしと見
へタリ是前ニ出タル陰陽弓ノ如ク前節計卷モ

ノアル故ニ斯かくハ云ルナリ元来弓ニ藤遣フハ損
矢ノ煩ヲ思テ為ス事ナリ額木上下関板ノキハ
矢摺藤ハ肝要ノ所ニテ何イツレ弓ニテモ是非卷ノ
所ナリ其外ハ節々ナリ故ニ節ノ上節ノ上下ヲ
卷ナリ鰯にへ離ルハ良やモスレハ前竹ノ節煩シ竹
、切ルハ外竹ノ節キハナリサレハ内外ノ節
凡ニ卷ナリ然ルニ勘畧略シテ前竹ノ節計卷リ人
モアレハ是節卷ノ本意ニアラナル事ヲ云ヘル
ナリ尤モ藤数多ケレハ弓ノ刃はね鈍ク矢勢弱シ此
利ヲ考ヘテ藤数省畧スルハ是實意ノ作なス処ニ

シテ畧制ト雖活物ナリ何ト云差別モナク見物
ナトニ拘リテ藤数ヲ増減レスハ無稽ニシテ死
物ナリ此所名聞虚躰ノ射人ノ可知事ニハ非ス
昔モ名聞ニ坐セル人モアルハ世ノ有様ニテ珍
シカラスト雖邪ヲ見テ正シキヲ求ヘシ弓箭條
々ニ多賀豊後守節卷をまけは重き間けしやう
にうるしを厚く置たるもふしまきなりトアリ
此書ハ高忠ノ記ニテ寛正ノ頃邪論アル叟ヲ可
知節卷ヲ卷ケハ重キトアルハ利用勘辨ノ事ナ
レハ聞ヘタレ化粧ノ為ニ漆ヲ厚ク置テ節卷

ノ如クニ似セルハ其實ナキ事ニテ虚躰ナリ信

用スルニ不足藤ヲ遣ハスシテ節ノ上計芋卷ニ

からむし

シテ漆ヲ塗タルハ節卷ノ名ヲ呼タリ凡無實ニ

非ス可考凡すべテ小笠原ノ古書類ヲ見ルニ禮容ニ

拘リテ實用ニ疎疎キ事少カラス取捨ナクンハ不

叶事ナリ又高忠聞書別記

多賀豊後守高忠寛正
五年十二月日トアリ

ニ弓に藤つかふへき事うら筈六寸矢すり五寸

もとはす五寸につかふへし藤の数定まらすは

すのうちにはつかいてもくるしからす弓馬故

實

伊勢六郎左衛門尉
平貞順記と奥書有

ニぬり弓に藤つかふ事先

ます

は三所藤をつかふか本也その外は何方に成とも心次第につかふへし定法有へからす惣別藤つかひても其上をうるしにてぬる事有ましき事也藤は白くて置おくか本也くちうるしをさす物なりナト記タルハナリテ不叶肝要ノ所也此上下ノ蕪藤矢摺藤ノ三个所かハ何レノ弓ニテモ藤ヲ遣サラレテハ煩キ変アレハ是非卷へキ肝要ノ藤所トス其外ハ何方ニテモ己カ好ニ任セ卷へキ事ニテ定法アルヘカラスト可知如此三个か所而已ニ卷テ餘ノ藤ハ不卷ヲモ三所藤ノ弓ト

云此三所藤ト前ニ述タル三所藤ト其名ハ同事
ナレトモ其制ハ異ナリ小笠原家ニモ此差別紛
雜セル事モアレハ則弓馬聞書記者
前出ニ軍陣にて
持へき弓をは黒くぬりて藤を三所宛遣ふへし
ト見へタリ此文意ニテモ考へシ三所宛トアレ
ハ上下矢摺三所ノミニ卷タル事ヲ云タルニハ
アラス節ノ上トモ節ノ上下トモ其卷へキ在所
ハ記ナスト三所宛トアレハ所々ヲ三所宛タ
ルナルヘシ其卷ク所ハ配分トモ云ヒ利用トモ
云ヒ節ノ上下節ノ上下ト三宛卷タルヲ三所藤

ト云又肝要ノ藤所ハカリ三个所卷タルモ三所
藤ト云ニテ其差別アリ混雜スヘカラス

遠的弓

遺稿曰遠的弓ト云モノ古キ書ニ不見當祐方曰今當大

的ノ事ヲ遠的ト云ナリ遠的ノ名小笠原ノ古書
モノ不見當一向ニ近世ノ名称ナリ太平記ニ皆
紅ノ扇ニ月出タルヲ矢ニ挟テ遠的場タテニソ
立タルケルト見ヘタルハ大的ノ事ヲ云タルニ
ハアラス委シクハ古代ハ小的射ニモ大的射ニ
大的ノ条ニ出タリ
モ弓ノ製ハ異ヘカラス遠的弓的弓ト別製ノア
ラサル事ヲ可知此遠的弓ト云モノヲ工夫シタ
ルハ差矢弓ト云別製ノ弓出来シ以来ノ亘ナル

ヘシ則其制ニテモ可考今當的弓ト云モノト差
矢弓ト云モノトノ間制ニシテ長サ七尺一二寸
位ヲ並トシ厚ハ七分以上八分以下強弱ハ其主
ノ弓勢ニヨリテ極ラス前竹ニ強ク火ヲ入レ内
竹コガシニシテ弓心ハ三本ニシテ天地ノ藤矢
摺藤ヲ短ク卷キ矢^{はね}刃ヲ強キ様ニシタルモノニ
テ鎖細ノ事ヲユミナル制也是レ泰^{たいへい}平御代ノ結
構ト云ヘシ猶ヲ下条差箭弓ト合見ルヘシ

篠張弓

遺稿曰篠張トハ木竹合セス竹ハカリニテ作タ

レハ篠張ト云ナリ篠シノササハ小竹ナリ源平盛衰記石
橋山合戦ノ条ニ文三家安カ五六歳ニモナリタ
マヒシカバ竹ノ小弓ニ小竹ササハギ矯ノ矢的草鹿ハ兎
コソ射角くコソ射レト云ヘリ小竹ヲタハメ弓ト
シテ小児ノ戯ニモ的草鹿ヲ射ル事ヲ教タリ古
跡ノ武士ノ實事ヲ察ヘシ古代モ小児ハ木竹合
タル弓ハ力不及故小竹ヲ弓ニ作り射ヲ學セタ
リ今當ノ篠張ト云モノモ幼童ノタメニ用ル弓
ナリ尤モ今當ノ篠張ハ小竹ニテ作タルモノニ
ハアラス小竹ノ躰ヲ云タルナリ本製ノ弓トハ

其製異ナリ本製ノ弓ハ弓心ヲ入側木ヲ左右ニ
當力木ト云モノヲ裡方ヨリ添テ仕立タルモノ
ナリ篠張ハ竹ノ皮ヲ削リ落シ強弱ニヨリテ三
四牧^(枚)モ竹ノ平ミナリ鰾ニテ付内外ノ竹モ其力
順薄モ厚モ削リテ仕立タル弓ナリ又弓足^(輕)輕ナ
ト配分セル数弓ニ急俄^{にわか}ニ臨テ止事不得此篠張
ノ弓ヲ作りテ渡ス事モアルヘシ其製ハ右ノ如
ク竹ヲ箴^(枚)牧ニモ早鰾^{早鰾}下ニ出スヲ以テ合セ外竹
ハ皮ノ方ヲ内ニシ内竹ハ皮ノ方ヲ外竹ノ方ニ
向テ付ナリ是ニテ力強シ弭^{からむし}ハ直ニ切付所々

ニテ卷キ用ルナリ兼テ貯置キ配分セルモノニ
ハアラス臨時ニ無ニ然シト云^{まて}迄ナリト知ヘシ

指箭弓

遺稿曰差矢弓ト云モノハ其制至テ^輕便ニシテ
矢勿ヲコト、ス又是ヲ堂弓トモ云ナリ洛陽蓮

(三十三間堂)

華王院ノ堂ノ軒端ノ下ヲ射通ス^夏盛ニ行タル

以来巧鍛タルモノ也則武藝^芸小傳^伝 日夏繁高カ 片
著述ナリ

岡平右衛門カ条ニ遠矢ノ弓矢ヲ制シカヲ不勞

シテ矢数ヲ發^発シ又力微ナル者ノ遠矢ヲ射ヘキ

弓ヲ制シト見ヘタリ此堂射ニ眼ヲ^み闇カサレ魂

ヲ奪レ射術ノ本意ヲ失ヒタル虚躰ノ射人ノ巧
出シタルモノト知ヘシ其制ハ裏反高クシ弓心
モ三本ニシテ強ク火ヲ入内竹ヲコカシ長サ大
概六尺八九寸曲尺ナリ厚サ七分四五厘ニスキス此カ
ヲ量ハ四貫三百目ノ引重ヲ掛テ無引或ハ何寸引ト云鬪射可見合上弦ヲ強クシ
手ノ内ノ當ヲ嫌ヒ丸村ニシタル弓ナリ今當指
矢前ト云別種ノ射事ヲ專專ラ修行セル射則ニハ
取扱フ弓ナレト予カ射則ハ鬪射真ノ勝負階階梯雇
ノ修行ヲ骨則トシタレハ此差矢弓ト云モノハ
不可用サレト今當世ニ行レタルモノナレハ其

評註ヲ爰ニ述ル可考

藤放弓

遺稿曰藤放ノ弓トハ新木あらノイマタカマホユ形

ニテ形モ取不直肩モ切ラス祐方云肩ヲ切ラストハ弭ヲ作ラス未ダ

弦ノ掛ラヌヲ云ナリ四角ナルマ、アルヲ云ナリ其名ノ

出タルハ弓馬秘説天文八乙亥年貞考御本甲出之トアリ貞考ハ伊勢伊勢守

也 二藤はなしの弓五張十張人に遣事又披露ひろの

事ふぢはなしの弓もはり弓の如く懸御目候数

は何張も同前八朔に大同藤より公方様へ五十

張進上候つる十張ツ、繩にて結候て進上候別

にこしらへ様はあるましく候弓馬故實に藤は
はしの弓二張三張も人に遣へしその拵様別義
なし繩にて二所三所も弓のはたらかぬ様にゆ
ひて出すへし繩の結め何方むすびに有てもわるしか
らす定くま法るはなしト見へタリ此名モ新シカラ
ス貞丈雜記伊勢平藏貞丈ノ著述ナリノ首書ニ昔鯨にて弓
を付ツ、ラ藤にて巻てくさび打て括らす也さ
れは藤はなしと云巻たるツ、ラ藤をときはな
したるま、と云事也今は古き弓のつるにて巻
なり又は芋繩からむしにて巻なりト見トアリ其説ハ能

ク聞ヘタレト其本證出所ヲ不記昔トハカリア
リテハ何頃迄ハツ、ラ藤ニテ卷タルヤ得會^レナ^会
リカタシ同事ニテモ昔ハツ、ラ藤ニテ卷タル
ナランカトアレハ臆^{せん}説ニテ本證ナリテモ濟^濟ヘ
シ夫モ及ヒタキハ出所ヲ尋タキモノナリ考ヘ
シ

弓製

丸村角村紫檀^{はす}彌
銀杏弭握太

流傳曰古事紀日本紀等ニ弓矢ノ見ヘタルカラ
ハ是ヲ製作セルハ勿論ノ事ナレトモ弓部ト云
モノ見ヘシハ日本紀^{養老四年五月二十一日}
^{舍人親王所撰之ナリ}人

皇二代綏靖天皇卯冬十一月中使弓部推彦造弓

倭鍛部天津真浦造真麿鏃矢部作箭トアリ是レ

我国ニ弓工矢工ノ見ヘタル始ナリ又延喜式長延

五年左大臣忠平撰スル所ナリニ梓弓一張長七尺六寸櫪長切

十五日中切短切遞加ていか一日削成ス三日一日小斧造ル

本ヲ一日瑩埋ル一日造附角裁草纏附料理カシナ桌續弦著

弓一日句本令熟三日塗漆三遍每遍乾二日造附

角長切日十枚中切日八枚短切日六枚裁草附長

切七十條中切六十條短切四十五條纏附長切三

十五張中切二十五張短切十五張料理桌續弦長

切五條中切四條短切三條ト見ヘタルハ丸木弓
ヲ製ル料ナリ麻々伎ト云名モ延喜式見ヘタリ麻
々伎ハ木竹合セタル弓ニテ今當ノ弓ナレト其
製モ作料等モ見ヘス其外古軍記古物語等ニ塗
弓白木弓或ハ藤ヲ卷キ其卷形ヲ以テ何藤ノ弓
ナト、名称ヲ施シ種々無類ナリ其製ニヨリテ
強弱鈍利得失損益アリ温故之卷鬪射之卷ニ出
シタレハ此卷ニハ畧之今當ノ的弓ヲ製ヲ述ル
前ニモ出ス如ク的弓モ一樣ナラズト雖村ハ丸
村角村ノ外ニ不出丸村ト云モノハ今當指矢弓

ト云モノ、村是ナリ内竹外竹トモツヤ皮ヲ削

去リ竹ノ角ヲ強ク落シ内竹ノ角ヲ格別強ク削タリ側木ニ肉

ヲ高ク持セ惣躰弓幅ヲ狭ク丸ク削為シタル村

ナレハ斯ハ呼ヒケン稀ニハ的弓ニモ此村的弓ニハ

ツヤ皮ヲ不
去皮付ノ儘ヲシタルモアレ氏本製ニアラス的

弓ハ角村ナリ角村ト云モノモ角ヲ立テ四角ナ

ルモノニハアラス内竹外竹ノ角ヲ少シ落シ側

木ニモ少シ肉ヲ置キムクミヲ付惣躰弓幅ヲ廣

ク為シ手ノ内ノ當ヲ取りタル迄ニテ丸村ニ並

タランニハ角ナレハ角村トハ云ナリ祐方云角
村ハ竹ノ

角ヲ強ク不取幅廣ニ村ヲシタルモノナレハ弓
ノ力至テ強シ故ニ今當名聞虚躰ノ射術者ハ弓
ノ力ヲ弱シタメニ丸村ヲ用タレサカイ此二品ノ村ニモ少

シツ、差アリテ丸村トモ角村トモ見分カタキ

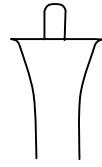
モアレハ元來ハ丸村角村ノ二品ノ外ハ無之指

矢弓ハ丸村的弓ハ角村ナリ又はず彌ノ形モ二様ア

リ指矢弓ノ弭ハ肩狭ク如此シ又銀杏弭

ト云モノアリ肩幅ヲ廣クシテ其形タトヘハ銀

杏ノ木ノ葉ニ似テ如此ナルヲ云ナリ今



當ノ的弓ノ弭是ナリ又紫檀彌ト云モノアリ是
ハ弭ノ形ヲ以テ呼タルニハアラス紫檀ト云フ

唐木ヲ以テ額木ノ関板ヨリ彌ヲ作タルヲ云ナ
リ其外種々ノ唐木或ハ黒柿嶋柿ナト又ハ銀ヲ
以^テ弭ヲ包ミタルモアリ祐方云源平盛衰記ニ上
下ノ弭ニ角入タル滋藤
ノ弓ヲソ持タリケルト見ヘタリ是上下ノ弭ニ
角ヲ入タルハヤ、モスレハ此所物ニ觸テ碎易
シ角ヲ入テ堅固詰構^{つく}盡シタル類少カラス此等
シタルモノナリハ皆觀美莊粧ノタメニナシタル事ニテ實用ニ
アラス無稽^{むけい}ノ製ナリ又古軍記古物語ナトニ握
太ナル弓ノ真中取テト見ヘタルハ小村ノシヤ
ウニテ村ヲスルニ握ヲ別ニ太夕削為ニハアラ
ス今當ノ弓ニテ握ハ太夕シタルモノニテ決^{けつし}テ

ホソカラス強弓ヲ賞美シタス文章ニテ村製ヲ
云タルニハアルヘカラス

祐方云流傳ノ所ハ村製ニテ弓ヲ新規ニ製作
セル叟ニハアラス勿論弓ヲ作ハ射手ノ預ヘ
キ義ニハアラス弓工ノ作ス所ナレト古代ハ
射手自ラ作シ赴モ聞傳ヘタリ且製作ニ不案
内ニテハ弓ヲ注文セシト弓工ニ侮レ手拔ヲ
ナス叟モアリナン仍テ政在先生ノ教ラレタ
ル所ヲ爰ニ追加ス熟見スヘシ是ヲ製造セル
ハ内外弓心等ニ用ル竹ヲ撰ミ製スル叟第一

ナリ弓ノ分合ニ順テ七寸巡ヨリ一尺巡ノ性

能キ節ノ低三年竹ヲ

祐方云三年竹ハマル二年竹ナリタトヘハ當年

ノ五月ニ生シ明年一年間ヲ置明後年ノ八九月ニ切レハ二年ナリ此ヲ三年ネト云ナリ三年ネハ竹ノ性強ヲカラス弱カラス程合ナリ若キ竹ノ性弱シ四年五年ト成タル竹ハ性強ケレトモハシカヒシヨリテ

コウカヒ起シテ煩ハシキ 八月中旬ヨリ十

月中旬迄ニ切り四割ニシテ青竹ノマヽニテ

薫ノ揚ル上ニ置キ翌春取出シ炭火ニテ身ノ

方ヲ黒ク色ノ付ホト焙レハ油流出ル其油ヲ

藁わらノホクニテモ古キ木綿ノ切ニテモ数扁フ

キ取り白クナリタレハ日ニ出シ乾セハ能ク

油氣抜テ竹ノ性堅クナリ色モ白クナルナリ
此竹ヲ弓心ニセルハ弓ノ分合ニ應シテ二ニ
モ三ニ^ツモ四ニ^ツモ細ク割リ又火ヲ強ク入レ色
黒クナルホト焦シ如此火ヲ強ク入焦セハ弓
ハシトシテ強クナルナリ
火ヲ不入ハ弓
鈍ミテアシ 皮ノ方ハ平ニ削リ裏ノ方ハ幅
ニ應シテ削リ落シ三本弓心ナレハ三本^ト竹
ニシテ^両側ニ^{はせ}櫛ノ身木ノ^{ぼく}莫ナル所ヲ大概分
合削リテ合セルナリ弓心三本^両側二本以上
五本ナリ又二本弓心ト云ハ真中ニ木ヲ挟ミ
木ハ櫛ノ
身木ナリ 左右竹ニシテ三本ナリ是モ^両側^ト

二五本ナリ是ヲ合セ様ハ鰯ヲトキ弓心ノ裏

表 祐方云弓心ノ裏表ハ竹ノ裏表 二流シ三本
マリ弓心ニ付タル所ハ左右也

弓心ナレハ真中ノ弓心ハ竹ノ平ヲ横ニ 竹ヲ平ニ

スレハ割目建ニ成テ片側ハ シテ皮ノ方ヲ弓
内竹片側ハ外竹ノ付所ナリ

ノ右ノ方ニ向 弓ノ右ハ射時ノ如ク弓 左右ノ
ヲ手ニ取テ人ノ左ナリ

弓心ハ左ハ皮ヲ左ニシ右ハ皮ノ方ヲ右ニシ

両側ニハ側木ヲ添上下ノ弭込ヲ圖ノ如ク入 図

レ流シタル鰯ノ乾又内ニ手早ク捻糸ニテモ

右弦ノ切ヲ結ヒツキタルニテモ左右ヨリ取

違へ たが 遠 ちがい 二掛ケテ卷キ糸ノ行違ノ所ニ銚 せん ハ 性

ノヨキ竹ニテ幅三四歩長寸四寸斗先ノ方ヲ
 次第ニ細ク薄ク削タルカ可シ尤青竹ハシマ
 リツロタ能干タルヲ指シ檜槌ニテ打込シメ
 竹ニテ作ルヘシ

乾シ置ヘシ又二本弓心ハ真中ノ弓心ヲ木ニ

セルノミニテ余ハ異ヘカラス左ニ弓心三本

ニ左右ノ側木ヲ奇合セタル圖ヲ出ス此圖ニ

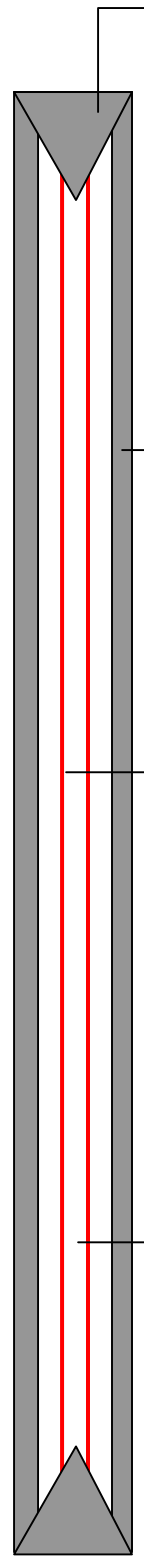
テ考ヘシ

弾込ミノ木上下トモ同

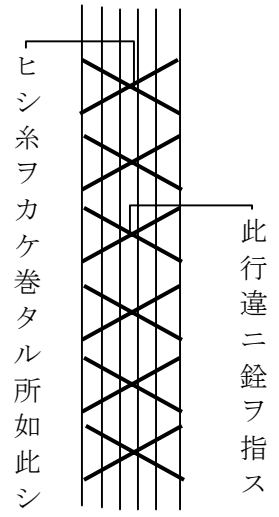
側木左右トモ

弓左ノ方ハ如此竹ノ身ト
 身合ナリ右ハ真中ノ弓心
 ノ皮ト右ノ弓心ノ身ト合
 ナリ

三本共弓心



祐方云朱ニテヌリタルハ木ノ色ノ心
 薄炭ニテヌリタルハ竹ノ身ノ方ニテ
 火トウリ焦テ黒クナリタル心ナリ白
 キハ皮ノ方ト知ヘシ



右ノ圖ノ如クシテ四五日乾シ置キ鰯能ク乾

タレハ糸ヲ解キ放シ裏表ヲ

祐方云裏ハ外竹ノ付所表ハ内竹

ヲ付ル所ナリ側木弓心ヲ並へ寄セル立棋ニ

ユヘニヲノツカラ竹ノ割目平身ニ成テ削リ落シ内竹外竹ヲ挟テ己カ思フ分合ヨ

リ厚クハ箴度モ削リ落ヘシ思フ程ノ分合ニ

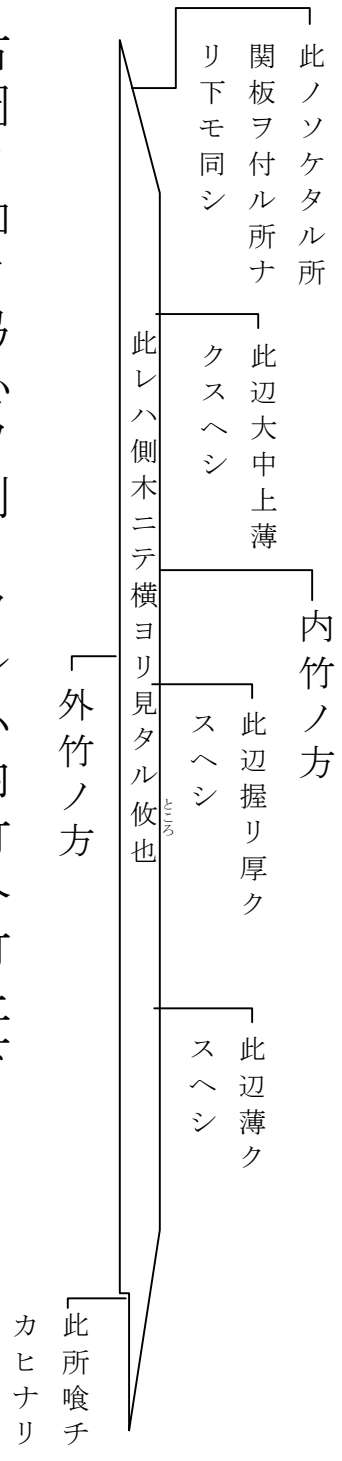
ナリタレハ上下ノ額木ノ関板ヲ附ル所ハ関

際ヨリ次第第二薄ク削リ落シ下ノ関板ノ裏外

竹ノ方下弭ノ端ヨリ二寸七八分上リテ切込

ヲ付外竹ニモ切込ヲシテ喰違ヲスヘシ弓心

ヲ削立テ横ヨリ見タル圖左ノ如シ



右圖ノ如ク弓心ヲ削リタレハ内竹外竹上下

ノ額木ヲ一度ニ附ルナリ内竹外竹モ彼ノ油

ヲ抜キ晒シタル四割^ツノ竹ノ裏ヲ_{身ノ方}鎮ニ

テ削落シ厚サ山ヲ持タル一番厚キ所ニテ一

分余リ_{祐方云厚ハ弓ノ強弱竹ノ大小ニモヨ}

ハ七分一二厘ノ弓ノ積リナリ又節ノ在所数

等ノコトハ鬪射ノ卷ニ出タリ_{くほみ}双見テ知ヘシ

真中ノ通りヲスキ落シ少シ窪_{くほみ}ヲ付小刀ノ先

ニテモ十文字ニ筋ヲ入レ

祐方云此窪ニ筋ヲ入ルハ鰾溜リ為也

鰾ヲトキ

鰾ノトキ加減下ニ出タリ

流シ乾シ置ナリ外竹

ノ下ニハ彼ノ喰違ノ切込ヲスヘシ額木ハ幅

一寸四五分厚サ弭ノ所ニテ一寸斗次第二薄

クヘシ長サ上ニテ五寸三四分下ニテ四寸四

五分

祐方云弓分厚薄長短ニヨルヘシ

ニシテ裏ニ鰾ヲ流シ置

キ但シ弭ハ不切角ナルマ、ナリ此額木内竹

外竹ヲ弓心ニ合セ上ヨリ下迄明キ間ナリ捻

糸

祐方云糸ノ太サ筆ノ軸ヨリ少个キ糸ナリ柔カニヨルヘシ堅キ糸ハ竹ニ糸ノ跡付テ

シ
ワロ
ニテ左右ヨリ取違へ前ノ如ク遠ニ巻詰

竹銚ヲ仮ニ打置キ長火鉢ニ炭火ヲ煽シ立テ

藁箒ニテ水ヲ流ル、ホト弓ニ打此火ニテ寛

々焙リ又水ヲ付テハ焙リ祐方云水ヲ打ハ竹糸ノ焦スタメナリ

如此箒扁モスレハ鰯ヤワラキテタラト流たら

レ出ル此時檜槌ニテ銚ヲ打込ミ糸シマリタ

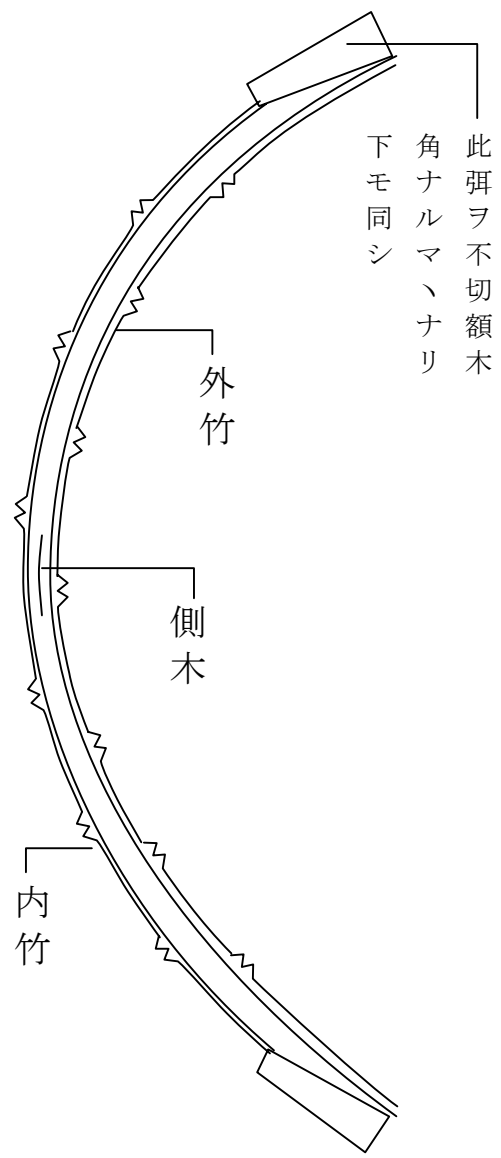
レハ裏反ヲ次第々々ニ丸ク取り祐方云裏反ノ取様ハ弓

幅ヲ廣弓ヲ持片膝ヲ折シキ片足ノ裏ニテ弓ノ外竹ヲ踏付両手ヲ上ナリニスレハ自然ニ

タハムひめぞり蒲鋒ナリニ蝦反握ノ形モナリ只真圓

ニ形ヲ取り置ナリ是レヲ能ク枯ラシ糸ヲ解

キ放シタル所ヲ藤放ノ弓ト云ナリ圖左ノ如シ



右ニ圖シタル所糸ヲ解キ放シ藤放ノ弓ニテ
 末形ヲ取不直丸ク反セタルマヽナリ是ヲ小
 村ヲシテ的弓ニモ塗弓ニモスルナリ元ノ製
 造ハ的弓モ今俗軍弓ナト軍ノ一字ヲ冠ラシ

ム弓モ異ナルヘカラス漆ヲ以テ塗藤ヲ種々
卷キタルニハ其名呼ヲ異様ニ施シタルモノ
ト知ヘキ

握卷様 葦裁様

遺稿曰弓馬故實 記者 前出 二にきりの卷様の事外竹

の前かどより卷始て外竹の外かどにて卷^{とめる}出へ
し長^サ又皮の廣^サ定まらず人の手により又好みに
よるへし上三卷下三卷は間をよせてすきのな
き様にまくへし中はいくつあり共すきの有様
に卷也卷始は木と竹との間より卷始め又卷出

も木と竹との間にて留べしト見タリ又射御之

卷 小笠原持
長ノ記也 二馬上ノ弓ニハ手タマリナシ中ヲ

モシカト詰テ卷ヘシ七卷九卷十三卷モ同前也

トアリ其外小笠原家ノ書ニ所見少カラスト雖

其節大同小異ナレハ繁文ナルヲ嫌テ悉々ハ畧

之又握革ノ事弓馬故實ニにきりの事黒革本也

但常に稽古の弓などはふすへ皮などにてても卷

へし略儀也白木塗弓何も替事なし岡本記ニに

きり革に事如く義あらはむめそめの革は用へ

し口傳あり上賢抄

記者
前出

に弓のにきり卷事皮は

不定先くろかはふすへ皮などにて卷へしト見
へタリ黒革ヲ用ユルヲ定法トシタレハ是等ニ
従テ可ナラン時トシテ何革ヲ用へタリトモ不
若ヨリモ見へタレハ其主ノ好ニヨリテハ黒革
ニカキラス何レノ革ヲモ卷へシ又此革ノ裁様
ニ習傳アリ先握^ツニ己カ好ミノ長ケ程ニ紙ヲ以
テ卷キ前竹ノ所ニテ飯粒ニテ付置其上ヲ好ノ
卷数タケニ墨ニテ書其墨筋ヲ小刀ニテ裁ハ握
革ノトキタル形ニ成ナリ則其裁タル紙ヲ革ノ
裏ニアテ置テ其紙ノ形程ニ切裏ニ能藥煉
ク ス
ネ ノ

事弦ノ
条ニ出
ヲ引テ前ニ出シタル如ク卷ナリ如此ス
レハアヤマチナリ至テ良法ナリ試テ知ヘシ

弓張様

流傳曰弓ヲ張事今當ノ射術者流ニハ弓工ノ張
様押移リ膊ニ本弭ヨリ五六寸程上ヲ押當テ張
ナリ弱弓ハ膊張ニモナレトモ強弓ヲ好テハ決
テ膊張ニハナラス故ニ弓工モ強弓ヲ張ニハ張

臺台ニ掛テ張ナリ張臺ハ弓工ノ取扱モノニテ射

手ノ用ルモノアラズ射御之卷記者
前出ニ御前ニテ

御弓ヲ張様ノ事何時モ次ノ間へ持出次間ニテ

張ヘシ持テ出ル様ハ御弓例式ノ如ク給テナデ
直シ握ノ上ヲ右ノ手ニテ前竹ヲ下ヘナシテ末
筈ヲ先ヘナシサケテ罷出次ニテ張ヘキ様ハ末
筈ノ弦輪ヲ能々直シテ東方カ南ノ方ノ柱ニテ
モ或ハ疊ニテモ末筈ヲ押當左ノ手ニテモ或ハ
何方ナリ托持テ右ノ手ニテ弦ヲ取休弦ヲ口ニ
喰テ右手ニテ筈ヨリ一尺握ノ方ヲ持テ左ノ手
ニテ押タワメ本筈四寸五寸上ヲ左ノ股ト膝ト
ノ間程ニ押當テ弦ヲ右ノ手ニテ掛ヘシ又膊ニ
押當テ張ト云沙汰アリ同輩ノ時ハ不苦也

云 祐 方
膊

張ニセル事射手ノ張様ニアラズ弓工ノ張様ナ
リ殊ニ人ノ弓ハ猶サラ失禮膊ニ掛テ張ル小
笠原家ノ法則ニモ不可有故ニ膊ニ押當テ張ト
云沙汰アリト記シタルハ他流ニハ如此シテ張
ルト云事ナリ但シ同輩ノ時ハ不若トアリ同輩
ノ弓ニテモ強弓ナラハ決テ膊張ニテナラス弱
弓ヲ張ル法則ナリ能々可考此時ハ弦輪ヲ口ニ喰テ張也或又

弦輪ノ関際トクワエテ張ヘシ不苦也主人貴人

ノ弓ヲ膊ニ當弦輪ヲクワエテ張事有ヘカラス

サテ弓ノ出入ヲ直シ張カワヲモヨク直シさして扱弦

ヲ下ヘ末筈ヲ先ヘナシテ例式ノ如クニ下ケテ

罷出御前ニテ出入ヲ見テ能直シ弦打ヲ二三ツツシ

テ例式ノ如ク進上可申口傳有之者也高忠聞書もうすべき

二弓を張時は末はすの弦輪をよく見て直くに
懸りたらは其まゝ置ゆかみたらはなをして隅
の柱に弓の末弭をあてゝ左の膝にあてゝ右の
手にて弦を取て喰て懸へし扱右の手にて握の
下を取て左の手を其儘置て次第ゝに弓を上は
取上て張^か白を見へしわろくは其儘弓を下にを
し當て直すへし押直す時は立なからも又狹ま
つきても直也北に末弭を向ては張間敷^{しく}也かけ
より張て出へし但し前にて張と所望あらは前
にて張へし賞翫^{しょうがん}の人の居たる方を後へなして

張事有ましく也但したとへ後なるとも北へ向

ては張^す更不可有張て後素襖すおうの袖にて弓のほて

り押拭ふきて出へし弦音少二三すへしト見へタリ

祐方云射御之卷ニハ弦打トアリ又高忠聞書ニ

ハ弦音トアリ弦打モ弦音モ同事ナリ此所ノ弦

打ハ弦輪ノ落付心アシキトキスル弦打ニテ弦

鳴ト云モノ更ニハアルヘカラスニ書ニ弦打ノ

数ヲニツ三ツト記シタレ氏数ニ拘ルヘカラス弓ニ

ヨリテ弦ノ落付アシケレハニツ三ツカキラス何ホ

トモス 此等ハ弱弓ヲ一人ニテ張ル法則ヲ云へ

ル更ナレ氏小笠原家ニテモ膊張ニセルニハア

ラス膝膝臺ニテ張ル趣ヲ考へシ七分五六厘以上

ノ三本弓心ノ幅村ノ裏反高ク荒木ノ弓ハ一人

ニテハ不張多人數ニテ張ルナリ勿論膊ニ押當
張ル叟ハ猶不成平家物語ニ義經カ弓ト云ハ二
人シテモ張モシハ三人シテモ張太平記ニ義貞
ノ弓ハ二人張参考保元物語ニ爲朝ノ弓ハ三人
シテ張源平盛衰記ニ和田小太郎義盛ハ三人張
二十二束三伏羲經記ニ横川覺範カ弓ハ糸包ノ
弓ノ九尺斗有ケル四人張異本保元物語ニ爲朝
ノ弓ハ五人張ノ弓長サ七尺五寸此外ニモ所見
少カラト雖是
レ掲ル違アラス
繁多ナレハ畧之ト見ヘタリ此二人張三人張四
人張五人張トアル名称ニテ知ヘシ一張ヲ二人

シテ張ハ押張者一人上ヲ抱者一人
ノ手ニテ上ノ額木ヲ弦共握リ
又三人ニテ張ハ
左ノ手ニテ鳥打辺ヲ持ナリ
押張者一人上ヲ持者一人
持様同上
弦ヲ掛ル者一人
弦ヲ掛ルモ張手ニ向右ノ手ニテ
又四人シテ
下弦輪ヲ持張手押曲タレハ手早掛
張ハ張手一人
三人ハリ以上弦ノ掛ル者アレハ
不及押タハメタル所
上ヲ抱手一人
同上
弦ヲ掛
ニテ弦ヲカケサスヘシ
者一人
同上
張手ノ右ノ足ヲ踏者一人
足ヲ踏ハ張
モタレカ、左ノ足ハ弓ノ方ニ踏込ミ右ノ足ハ
少シ踏開キ左ノ手ニテ弓ヲ押込ニ順テ體ハ猶
ヲカカリ右ノ足體ニ付テ弓ノ方ニヨリ行踏手
ハ張手ニ並ニ横身ナリ左右ノ足ヲ踏開ミ左ノ
足ヲ張手ノ右ノ足ノ進退ニ順テ進メハ進ミ退
ケハ退キテ左ノ足ヲハタラカセ踏マタヘル也

以上四人ナリ又五人シテ張ハ張手一人同上上ヲ

抱者二人二人ニテ抱ハ左右ニテ抱ナリ一人ハ同上一人ハ左ノ手姫反辺持右ニテ一

人ノ左ノ手ノ下弦ヲ掛ル一人張手ノ足ヲ踏一
ヲ持テ押ヘシ

人以上五人ナリ如此数人シテ張托其主タル所

ハ張手一人ナリ其弓ノ強弱鈍利曲直ニ順テ身

體手足ノ働アリ心ヲ配ラスンハ張損スル事ア

リ筋骨ヲ強クハリ面色ニ赤ミ顛レ眼ヲ張出シ

石持力試ナトセルカ如ク力張ニスレハ五人シ

テ張ル弓ヲ二人ニテモ三人ニテモ張ヘキサレ

托力張ニシテハ張曲ミ出来厚分弓ハ弱弓トハ

違ヒ踏直テモ容易不直強弓ヲ数張試タル上ナ
ラテハ其程合自得ナリカタシ射手ハ弓ヲ射碎
ハ少モ耻辱恥ニアラス取扱粗シテ張碎踏メキナ
トセルハ射手ノ大ナル耻恥ナリ心得アルヘシ又
此所ニ味合ヒアリ腫物ニサワルカ如シテハ取
扱ヒニフクシテ弓ヲ張亶ハ不成数張ノ弓ニテ

手錬ノ上ナラテハ會得成カタシト知ヘシ祐方云弓

馬聞書ニ弓をはる事貴人主人の弓をははかに
よはくともつよき弓の如くに兩人してはるへ
き也射手搔副記に年月記者不知御主の弓ナト
ハ七ッハツの幼少の人弓なり小笠原ノ書也つよき弓の如く
可張弓馬故實に主貴人の弓はあまりよはくみ
えぬ様にはる物也と見ヘタリ主人貴人ノ弓ニ

カキラス何人ノ弓ニモセヨ弱ク凡取扱ヒ粗テ
ハアヤマツ夏モアルヘシ張誤テ碎タルハ射手
ノ耻ナリ主貴人ノ弓ハ猶更ノ夏ナレハ取扱ヲ
大切ニサセンタメ右三書ニ如此ハ記セリ可心
得夏
ナリ

弓蹈直

流傳曰此事ハ弓ヲ張り左右ノ出入或ハ上下形
何所ニテモ其心ニ叶サル所ヲ蹈直ス事ニテ何
人シテ張凡張手一人ノ役ナリ前章ノ如ク弓ヲ
張立テ右ノ手ニテ握ヨリ下五六寸ノ所ヲ持チ
固メ左ノ手ヲ其マ、次第々々ニ内竹ヲ摺リ上
ケ握ヨリ上一尺余リノ所ヲ持固メ
如此持固メ
ハ弦ハ右ノ

一ノ腕ノ内左ノ一ノ腕ノ内ニアリ
左右ノ手ニテ弦ヲ挟ミ弓ヲ固ル也 弓ノ出入ヲ

見定ヘシ則高忠聞書ニ弓をひさに押あて、お
して右の手にてつるを懸へしさて右の手にて
にきりの下をとりて左の手をそのまま、置いて次

第^二に弓を上へ取上げてはりかほを見へしわ

ろくはそのま、弓を下におしあて、なおすへ

しおし直す時は立なからも 祐方云立一カラ直
ハ上下ヲ持固タル

所ヨリ末筈ノ方カ本弭ノ方ノ
曲タルヲ下ニ當ネシ直スナリ 又ひさまつきて

も直す也トアリ心ニ叶ハサル所アレハ其曲ヲ^ミ

能ク見定メ出曲ミナレハ末弭ヲ己カ右ノ方ニ

ヤリ又入り曲ミナレハ左ノ方ニヤリ其儘弓ヲ
下ニ横ナリニ置キ左右ノ手ヲ伸シ手幅ヲ廣ク
弓ヲ握弓ノ上下ヲ握ナリ左ノ膝ヲ折敷キ膝頭ニテ弦ヲ
押へ膝頭ヨリ六七寸下俗ニ蟻不這ト云所ニテ
弓ヲ押へ右ノ膝ハ踏立足ノ裏ニテ曲タル所ヲ
踏込ミ左右ノ手ニテ弓ヲ上ナリ持上レハ其所
タワムナリ兎ニモ角ニモ己カ心ノマヽニ踏直
ヲス此踏直ニ順テ身體手足ノ働キ種々アレト
書取カタキ此所ノ懸引程合言語筆力ノ及フ所
ニアラス大事ニ迫リ用心過キテハ柔弱ニナリ

テ踏事キカス曲不直又取扱ヒ手粗テハ踏返シ
或ハ踏碎或ハ踏折ナトセリ数張ノ弓試タル上
ナラテハ自得ナリカタシ手鍊アルヘシ

射手村

流傳曰射手村トハ引味ノ己カ心ニ不叶所ヲ自
己ニ押削ル叟ヲ云ナリ既ニ源平盛衰記ニ三人
張二十三束三伏ヲゾ射ケル荒木ノ弓ノイマタ
削治メサルヲ押張テスヒキシタリケレハチト
強キヤラント思ケルト見ヘタリ此削治メサル
トアルハ射手自己ニ村セシ證據ナリ逸見家ノ

弓書ニモ京都將軍家治世ノ時右近ノ馬場ニテ
射藝見給フことアリ其時然ヘキ射手ノ己力持參
ノ塗弓ニ引味ノ心ニ不叶所ノ有ケルヲ五所マ
ソ推削吾心ニ叶フヤウニ認テ後射事ヲ務メタ
ルトアルモ射手村ニテ古代ノ武士ハ自己ニ弓
ヲ推削テ村セシ亶ノ實意ヲ察ヘシサレト此京
都將軍トアルハ何將軍ノ時代ナルヤ足利家モ
末ニ至テハ衰微シテ將軍ノ威勢ナシト雖十五
世ナリ此足利家ヲ京都將軍ト云タレハ何代目
ノ將軍ト記シナケレハ詳ナラス三代目義滿將

軍ノ頃專ラ行レタル小笠原家ノ書類ニ村刮弓

ト云モノモアリテ

温故之卷ニ委シク
評註アリ見ルヘシ

其削所ヲ

定テ村ヲセル事ナレハ是ヨリ以前ノ叟カ猶ヲ

今當ノ武士ハ大平ノ化ニ流レ弓工ノ削タルマ

ヽニテ引味ノ己カ心ニ不叶事ヲモ不知唯ニ張

白ノヨキ見物而已満悦セリ射手村ハ其弓ノ引

味ノ悪キ所ヲ知テ自己ニ此所彼所ト削ルコソ

射手村ノ肝要ナレ弓術不案内ノ者ノ知ヘキ叟

ニハアラス實事正路ノ修行シテ修練ノ上ナラ

テハ其引味己ニ自知ナリカタシ此所ヲ思惟シ

テ實事ニ迫リ修行セハ自然ノ斯ニ至リ發明セ
ル叟ニテ射手村ト云モノハ別ニ習傳ノアラサ
ル叟ヲ知ヘシ

遠路弓持様

流傳曰射法一統

淺野正親
カ著述也

ニ遠路へ弓持事アラ

ハ必時節ヲ可考春ノ末ヨリ秋ノ中頃迄ハ持ニ
クキ物也弓勢損ル叟アリイカントナレハ近代
漆皮トテ二張立ノ弓持スル時是ヲカケテシム
ルシカル時持モノ鋒ノカタツクヲウルサク思
ヒ強クシムル故ニ下ヘカナラス下ルソノ故鳥

打ヨリ大中へツヨミカタヨル其故ニヒメ反ヒ
シトツク矢摺藤ノ内ニハリカクル所弓請ノ當
ル所押ヌク乙腰ハ肩ニ當ル故ニ其温ニテ後ヨ
リノス心アレハ矢摺ヨリ大中ノ下ツラヘカケ
イヨク弱ナリ上下ハツヨシ長途ノ日ニ當リ雨
中ニハ雨露ノ内ニテムサレ弓クルヒユカミ出
損ル事多シ漆皮ムツクリトカケ度事也近キ頃
肩當皮 祐方云下出ス
肩當皮トハ別也 トテ弓立ノ後ニツケテ
持道具工夫シ出シタリヨキ亶有カタノ當所ア
タ、マル事ナシ持者ムツクリト肩へ當ル故ニ

肩少痛持ヨシしかしながら乍然弓アセカク事有折々心ヲ付
ヘシ又弛弓ナト持夏アラハ包ヤウ大事也上ヨ
リ下へ一様ニ包ニヨリテ下へハ水入ル事有也上
ヨリ中迄卷又下ヨリ中迄包中ニテ包合屋根フ
キタルコトク扱其上ヲ二三張迄ハ一ツニ結打藁
ニテヒシくト卷一張ツ、卷ハ猶ヨシ其上ヲ一ひと
カラケニ結合又竹ノ皮ニテ上カラト下カラト
屋根葺ふタル如ク竹ノ皮重々シテタム扱又ハ上
ヲコモむしろ蕈ニテモ包固メテ其薦こもノ上へ竹ノ皮一
牧通枚キセタルハ猶ヨシ上包ハ荷スレサセマシ

シキタメ其外ノ竹ノ皮ニテシタムハ水入マシ
キタメ其下ノカラ包ハシトリヲ入マシキタメ
又其下ノ竹ノ皮ハ若水ククルトノカレン爲也
如此包ハタトヒ大雨ニ逢ト其マヽスルヽ事ナ
シ扱又道中何々ノ川越ニ上下濡ル事多カルヘ
シ若濡タラン時其所ハカリ解キ竹皮薦藁ヲ干
テ又包ナヲスヘシ上カラカヽル水ノ下ヘヌレ
トヲル更ハナシ川ヘ入タルトテモ一町二町行
間ニハ中ノ弓ヘシミトヲル事ナカルヘシ又其
儘ヲケハ皮薦藁シミタル其シトリニテ二日モ

弓ヲ水ニヒタシタルニ同シキ故ニハナル、物
也道中川越へ時ハ弓反ヲ上下へシテ荷ニ付へ
シカツク_一佗然也ト持行者ニ能可言付ト見へタ
リ弓臺二張立_{弓臺ノ}或ハ被革箱立_{下ニ}ナト
云ヘル物ニ弓矢ヲ組合セ_{かざり}飭付テ持シムル_{下ニ}今
當大名大祿ノ武士ノ旅行ノ風俗ナレ佗實事ヲ
取失タル_一更ニテ弓矢ノ用ハ大底ニナリ只ニ行
列ノ_{壯觀}莊觀而已ニ持シル_一更ニナリタリ古代ハ大
將タリトモ自身ニ矢ヲ負ヒ弓ヲ持タリ徒者ニ
持セシムルトモ矢ハ矢室ニ盛テ負セ弓ハ弓ノ

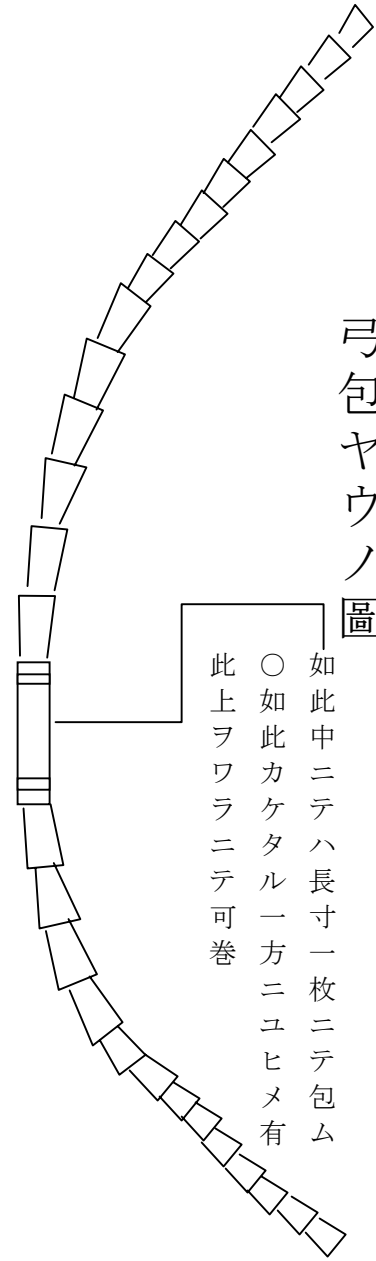
ミカタカシムルナリ則高忠聞書ニ下人空穂付
させて弓持へき様の事弓を立て、弦を先へな
して握の下邊辺を右の手に持へし肩にかつきて
持へし馬より先右の方に持へし又馬の跡にも
持するなりと見へタリ又射御之卷ニ馬ノ先へ
歩ノ供衆弓ヲ持事ハ自身持事本儀ナリ小者中
間ニ持セル事當世ノ畧義也不苦也然トイへト
隨兵軍陣ノ時其外晴ノ所ニテ自身弓持事根本
ノ義ナリトモ見へタリ此等ノ文義ニテ可考於
迎中急變とちゅうアレハ直ク様ニ差出ス儲ニテ其急俄

カクル事アラス古烈士ノ實事ノ風俗ヲ察スヘ
シ今當ノ弓臺ニ張立被革箱立ナント云ル類ノ
物ニ數日飭付テ持かざりタシメタルトハ同日ノ論ニ
アラス古今ノ時變アリテ今當ノ風俗ニ押移ハ
己一人ノ更ニアラス天下一統ナレハ是非不及
義ニテ古代ハトモアレ時宜ニ任セ弓臺被革ナ
トニ弓矢ヲ組合持スルト武士ノ根性ニヨイテ
ハ古今ノ差別ナシ古昔ノ實事ヲ失フヘカラス
又此飭弓ヲ長途ノ旅行ニ持シムル時節春ノ末
ヨリ秋ノ中頃迄ハ持ニクキ物也トアリ數日張

詰メ雨露炎天ニ觸レハ塗弓タリ托損易シ取分
温氣ノ砌みぎりハ鰐ヤハラキ別シテ煩ラハシキモノ
ナレハ大名ハ弓奉行大祿ノ士ハ自身心ヲ配リ
持スヘシ不案内ニテ等閑ナル時ハ必損事物ノ
用ニ不立心ヲ用ヘシ又弛弓持様右ニ見ヘタル
所可ナリ兎角炎天雨露ニ觸テ損サルヤウ工夫
シテ可持事肝要ナリ則竹ノ皮ヲ以テ包タル圖
ヲ出タレハ便見ノタメ其圖ヲ模写ス勿論摺傳
ナトハアルヘカラス其人ノ工夫ニアルノミト
知ヘシ

弓包ヤウノ圖

如此中ニテハ長寸一枚ニテ包ム
○如此カケタル一方ニユヒメ有
此上ヲワラニテ可卷



右ノ圖ハ射法一統ニ見ヘタル所ナリ

弓包様

流傳曰弓ヲ包ハ送ル方ノ高昇ニヨリテ上品ハ

檀^檀紙中品ハ引合下品ハ杓^杉原ニテ握ヲ包ミ水引

金 水引モ先方ニヨリニテ結ヒ進物ニスルナリ其
銀 紅 白ヲ用ヘシ

包様ハ包記

伊勢平藏貞丈著述奥二
實曆十四年甲二月十二日

二弓を包

む事にきりの所を包む也紙をたてに二ツに折て
折めを外竹にあて右の手にて紙を取まはして
前竹の真中にて紙の端を細く折返して水引に
て中をゆふへし弦かけたるも弦かけさるも同
し但弦かけたるは弦をは包ます鳥打のあたり
を紙よりにて弦を引まはし弓とつるとの間に
てやりちかへて前竹の中にて結ふ也弦かけた
るとははりたる弓にはあらずはすしたる弓に
弦をかけそへたる也トアリテ其圖モ出タレハ

則下ニ模写ス是等ノ叟ハ禮法者ノ知ル所ナレ
凡射手モ心得ヘキ義ナレハ爰ニ記ス熟見スヘ

シ

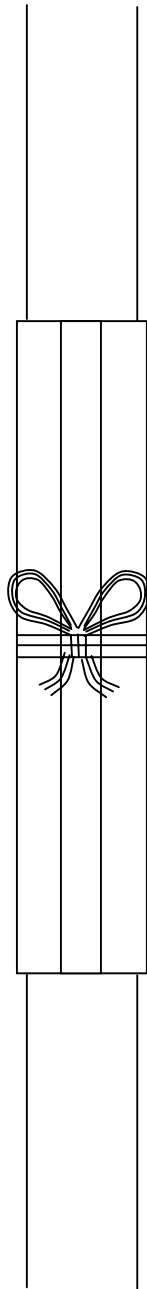
包記ノ圖

此所を包むにぎりの所也



水引にて結又紙よりにても結

如此内竹の方にて紙を合せ陽を
打返す中を水引にて結



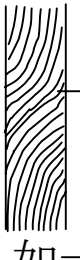
水引はかたわなにも両わなにも結ふとあれとも
弓はひらみある物なる間両わなに結へし

弓疵見

流傳曰側木ニ疵ノ出ルハ細微ナル木理ニ多シ
龍木理藤卷ナト云フ類ノ觀美ナル木理ニハ別
シテ多シ其疵ノ大小ニヨリテ蜈蚣むかでシナヘシナ
ヘカンニフホメキナト云也疵ニヨリテハ厚分
弓ニテモ左迺害ニナタサルモアレより何レ疵物
ナレハ其時所ニ仍テハ用ヘカタキモノナリ蜈
蚣シナヘト云ハ上ノ形或ハ下ノ形ニテモ内竹
ノ方ニ額髮ノ髮屑ヲフリ掛ケタル如ク細ク横
筋ノ入タルヲ云



如此蜈蚣ノ足ニ似レハ

是ヲ名トス此疵磨タル新弓ノ側ニハ見分カタ
シ心ヲ付テ改ヘシ又シナヘト云ハ横筋入りテ
シナヘタレハ斯ハ云ナリ数入ルモノニハアラ
ス又カンニフト云ハシナヘノ深ク大ナルヲ云
此疵甚はなはタ六ヶ敷シ又ホメキト云ハ木ノ理メノ堺
ハナンタルヲ云タトヘハ  如此ナル堺
ヨリヲキルモノ也表ニテハ少ノ変ニ見ヘテモ
大疵ナリ克々心ヲ用テ見ヘシ又墨入朽入など杯云
アリ此ハ生木イキキノ内ニ疵出来水ナトサカリ込ミ
ツ入り黒ミノ出来タルヲ云是モホメキト同様

ノ難疵ニテ用ヘカタシ賣職ノ弓工ハ此等ノ疵
ヲ村ニテ蔵ニタルモノナレハ不案内ニテハ疵
アルヲモ不知求ル事モアリナン能々心得ヘシ

鰯起付様

流傳曰鰯ヲキ付ルハ弓工ノ爲ス_{しる}トモ射
手モ知ルヘキ_{しる}ナレハ其附様ヲ記ス内竹外竹
ノ節々額木ナト其外何所ニテモ離タル所ヲ付
ント思ハ、其所ニ水ヲ流ル、程付長火鉢ニ炭
火ヲ煽シ寛々遠火ニテ焙リ水乾ハ又水ヲ付竹
ノ焦サル様ニ心ヲ配リ焙レハ自然ニ鰯ヤワラ

クナリ鰯柔ひニナリタレハ竹篋ノ先ヲ薄ク削リ
竹卜側木卜ノ間へ指込メハ口ヲ開キ鰯ニテ付
ケタル木竹ハナル、ナリ此離シタル木竹ノ間
ニ竹銚ヲ指込ミセハ前ニ指タル篋ハヲノツカ
ラ拔ルナリ拔サル時ハ拔取り弓ニ下地付タル
古鰯ヲ残サル様ニ能々コサケ落シ祐方云古鰯
残りテハ新
鰯ノ付コ、ロ
アシク能可落 其跡ニ竹篋ノ先ニテトキタル鰯
ヲ能ク入テ含セルナリ鰯トキ様ハ鰯ヲコマカニ
タ、キ碎キ銅ノ薄鍋ニテ
モ焼物ノ類ニテモ可何ニテモ其中へ水ト碎タ
ル鰯ヲ入レ炭火ニテ寛々煮ナリ鰯煮上リ吹出
セハ竹篋ニテ能交セ合セ其加減ヲ見テカタク
ハ水ヲ指シヤハラカナレハ又鰯ヲ入加減能煮

タレハ次ヲ放シアツ灰ノ上ニ置キサメサルヤ
ウニスヘシサメレハカタクナリテ悪シ其練リ
加減ハカタカラスヤハラカラスヘツトリトナ
リ篋ニテスクヘルナトナルヲ可トスヘシ又竹
筒ヲ底ニ節ヲ一ッ残シ巡リノ皮ヲ削去リ薄クシテ
其中ニ水ト鰯ノ細クシタルヲ入鍋ニ湯ヲ涌シ其
湯ノ中此竹筒ヲ入湯己カ思フ程鰯ヲ含タレハ
煎ニシタルハ猶ヲ可
嚙セ置タル竹銚ヲ拔ヘシ此銚ヲ拔取レハ大概
口ヲ塞キ鰯ヲ嚙出スナリ其嚙出ハ余リ鰯ナレ
ハ篋ニテコサケ取り其跡ヲ紙ニテ拭ヒ弦切ニ
テモ柔ナル捻糸ニテモ鰯付シタル所ヨリ上下
ニ少シ廣ク左右ヨリ糸ヲ取違^{たがいちがい}遠^{しか}二睨^{しか}ト卷^様キ
内竹ノ節ナレハ其節ニ糸ノ十文字
ニ糸ノカ、ルヤウニスヘシ外竹モ同 其十文字

二組タル所ニ内竹ノ起タルニハ外竹ノ方外竹

起タルニハ内竹ノ方ニ假かりニ銚ヲ指置キ如此銚ヲ打テ

ハ内竹ノ節起ハ節真上糸十文字ニアリ外竹ノ銚打ハ節ヲハツル、ナリ節ニ銚打テハ節カケ

テワロシ心ヲ用ヘシ外竹ノ起タルモ水ヲ流ル同シコトニテ内竹ニ打ヘシ銚製前出ス

、程付卷糸弓ノ焦サル様油断ナリ寛々ト遠火

ニテ焙レハ鰯柔ク其時假かりニ指タル竹銚ヲ櫂槌

ニテ打込ハ卷タル糸ハ縮ルしまニ順テ弓ニ伸反出

来ナリ弓ノ通りヲ見渡シ伸反アレハ其ネチレ

ヲ直シ又水ヲ付テ焙リ銚ヲ少シツ、打込ハ鰯

口能ク合塞キ鰯少シ流出ルナリ又流出タル鰯

ヲ竹篋ニテ能取り其跡ヲ紙ニテ拭ヒ其マヽニ
三四日乾シ置キ能ク乾タレハ卷糸ヲ解キ放ス
ヘシ流出タル鰾取様粗ナレハ此糸解タルトキ
ニヘノ固リ付テワロシ其時ハ小刀ニテコ
サケ落シトクサニテミカキ
猪牙ニテツヤヲ付置ヘシ 如此糸ヲ解キ放シ
見レハ弓ニ伸反アリ此伸反ハ銚ノ指様或蹈様
ニテ出来モノナレハ己ニ試モテ實物ニ多ク當
サレハ會得ナリカタシ

鰾製

遺稿曰鰾ノ事今世ハ鹿鰾ヲ專ラ用テ魚鰾ハ不用
也今世ニ魚鰾ト云モノハ鮫ノ類ノヒイヲ取集

祐方本ノマ、ト、ラカシテト云事カ

テ煎シトウカシテ鰾トセル也此物鹿鰾トハ違
ヒテ一向ニ柔ク弓ニハ難用ト云ヘリ古代ハ即
鰾ト云魚ノヒイ袋ヲ取集テ煎煉シテ弓ヲ制ル

也此鰾ハ甚剛強ニシテ假令水中ニ投入シタリ

たとえ

ト容易ニ離ル事ナシト聞及ヒタリ此鰾ノ法取
失ニタルニヤ今ハ用ル人ナシ鹿ヲシテ鰾ニ制
シ代ル更世ニ行ル、故ニ是ニアツケ不改テ是
ニテ濟済シ来レルニヤ右鰾ト云魚ノ形ハ鯛ニ能
似テ其色蠟色ニテ腹ノ傍ニ置テ少シ赤色也尾
ハ鰾かたいニ似テ雁股ノ如クナラス甚美味ナルモノ

トソ今備前國ノ海ニテ多ク取テ貢納ニセルト

云ヘリ鰯ノヒイハ鯉鮒こいふなノ風袋ト云物ニカハラ

ス此物則鰯ニ制作セル事也今ハ弓等ニハ不用

箏三弦ノ糸ヲ制スルニ此鰯ヲ用ル也此鰯ヲ制

シ弓ニ用ヒ試度度也鰯ト書ニ因テ考レハ古代

此魚ヲ用シニヤ猶可尋事也又鹿鰯ト云モノハ

鹿ノ頬皮ほお俗ニ臍黒ト云男鹿ナリ是ヲ最トス取テワラノコモク

ニ二三日ホドイケ置是ハ毛ヲヒカ扱取出シテ

竹刀ニテヘラノ毛ヲ摺落シヲハツテ若毛ヲチ

灰ヲフ随分細カニキザミ鍋ニ水ヲ能ホト入ク
ルナリ

タンノ刻メル皮ヲ入炭火ニテユルくトマセく

煎シタヒカイ村ナクナリタル時布ニ入テシボ

リテコスナリ夫ヨリ大竹ノ筒ニ入アツ灰ニイ

ケヲキ又クルリクルリトマセテ能々煉レタル

時塗物ノ上ニタラクト落シテ見ルニ其ヲチタ

ル玉ノナカレサル時かた歎ニ入テ乾シタツルナリ

方圓ハ入ル物ニヨレルモノ也此傳來ハ紀伊國

神川ノ傳ト云ヘリ大口覺右衛門ヨリ大口權九

郎子積つぐづみニ傳フ子積ヨリ北村三之せんとく烝直温ニ傳フ

直温ヨリ愚士ニ投惠セラル至テ良法ナリト云

云

祐方云此傳來ト云レ
タルハ鹿鰯ノ法ナリ

追加

祐方云京都磔師吉近傳兵衛ト云者ヨリ鰯

製ヲ記シ主信先生へ送リシ文言ニ云鰯魚

干御存ト存候へおよそ凡厚ミ貳分位長八寸位

巾三四寸位御座候赴右魚凡四五日程水ニ

漬置テ和ク成候ハ夫ヲ煎ニ入置釜ニ水ヲ

入湯センニシ凡一日二夜位焼申候其後ニ

ツトリトイタシ候へハ薄キ箱様ノモノへ

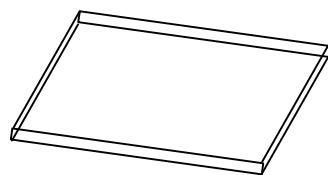
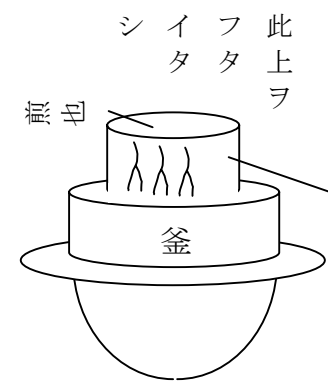
明申候テ風ノカハキニテ少シ堅ク相成候

所ヲ切り一宛    如此ニ繩ニテク、リ

干申候

祐方此所ハ何ナル不明ナリ圖

ノマ、ニ写シ置ク



煮候上ニテ
朋物ハ如此ア
サキ物ヨシ

右ノ二品ノ圖ヲ出シ其尾ニ別段ニマセモ

ノハ無之焼申候時分ハ十月末ヨリ正月迄

ト申候此頃ヤワラカク堅ク相成候トアリ

今當京都ノ弓工ノ用ユル所ノ製ト見ヘタ

リ又貞丈雜記ニ弓の木竹を付る膠にかわは野猪いのしし

の肉を煮てと、らかしねりかためたる物
也是をにへと云也ト見へタリ此鰾ノ製ハ
殊ノ外ノ異制ナリ強弱イカ、アルヘキヤ
時アラハ試タクモノナリ

早鰾

流傳曰早ニフト云モノハ器^器物ニテモ銅ノ薄鍋
ニテモ水ヲ入レ膠ヲ細カニシテ其中ニ入炭火
ニテ煮ヨリトケタレハ又其中へ鹿角ヲ粉ニシ
テ入竹篋ニテヨクマセ練ルナリ又鰾^{鹿ニヘ}
ノ事也ヲ
常ノ如ク煮テ其中ニ女ノ齒ヲ染ル鉄醬ヲ少シ

加へタル可ト云へり此早鰲ノ法モ竹林流派射術
者大口東馬ヨリ傳來ノ赴ナレト如何アルヘキ
ヤ折アラハ試シ其強弱乾キ加減等知リタキモ
ノナレトモ未タ不試

弦之部

的弦

流傳曰的弦ハ的弓ニ掛ル弦ナリ白木弓側白弓そば

村刮弓等ニハ白弦ヲカケルヲ定法トシタリ前むらこぎ

章的弓ノ条ニ述ル如ク古代ハ歩射ニモ塗弓ヲ

以テ禮トシタレ延喜式足利時代ヨリ戰場弓ニ見へ

又馬上ニハ塗弓歩射的類ヲ射ニハ白木側白村

刮ト其取分ヲ付テ弦モ馬上ノ弓ニハ塗弦ヲ掛

歩射ノ的弓ニハ白弦ヲ掛ヘシト小笠原家ヨリ

馬上歩射ノ分ヲ付テ其式法ヲ定メタリ則弓馬

故實

記者前ニ
出タリ

ぬり弓には必弦をも同弦輪まで

ぬる也然間白木には必弦も白弦なるへし自然

ぬり弓にて的丸物など射る叟あらは白弦を懸

て射へし若又白弦なき時は仕様あり口傳あり

祐方云白弦ナキ時ハ仕様アリトハ
上下ノ弦輪ヲ白紙ニテ卷テ射フ也惣別ぬり弓

にて的草鹿圖物など射事略義なり晴の時は射

間しき也的出張記

記者
前出

にぬり弓に白弦かけき

る事也并ならびに白木にぬり弦かけぬを心得へし弓

馬聞書

記者
前出

にぬり弓に白弦かくる事有へから

すト見へタリ塗木ニハ塗弦白木ニハ白弦ヲ掛

ヲ定法トハシタレトモ不得止事時ハ塗弓ニ白
弦ヲカケ又白木ニヌリツルヲカケル事モアリ
ナン弓馬故實ニ見ヘタル文義ニテモ一概ニ思
フヘカラス時宜^じニ順テ可ナラン元來塗弓ニ白
弦ヲカケ白木ニヌリ弦ヲカケタルハ弓ト弦ト
不釣合ニテ半班ナレハ彼レ是レトヤカマシク
云タルト知ヘシ

弦製

遺稿曰弦ヲ指ハ上々真麻^{或ハ常ノ}ヲ能々水ノ
シニ入乾立テソレヲ随分柔カニシユキ上テ先

吾思フ程ノ太サニ麻ヲ揃テ指竹ノ締ニ結付テ

右ヨリニヒネル夫ヨリツキくノ苧ハ細ク本結

一筋ノ太サ程ニシテ幾筋トモナリコシラヘ置

繼度コトニ麻ノ頭ヲ小刀ニテコソケロニテシ

コキ苧頭ノヨク尖ルヤウニシテツキ目上ニ頭

レ又様ニ真中ニ差込テツクヘシ弦ノ太サ大概

五分・六匁・六匁五分・七匁計マテヲ 大概四尺計ナ

義トス此余好ニヨリ弓ニヨル也 リタレハ弦サシ竹ノ筈ニ掛テ折返シ又四尺計

ヒネリテサシ竹ノ締ニ締ニ結付其俣能水ニヒ

タシ糊(麴)水ニヒタシタルモ可也弦乾ア 夫ヨリ張

カリテ苧肌割レスシテ可ナリ

竹ニ掛テ張

祐方云張竹ニ不張ニ拾貫目ハカリノ右ヲ釣下置モ可也

藁ノホ

クヲ以テ上ヨリ下ニコク数返シテ乾シ又水ヲ

掛テハ数返刮ナリ如此スルヲ六七度其時ヨリ

ヲモ五六度カケテ次第ニ強ク張ナリ

但シ上弦ノ刮八十

返計中弦ハ四五十返コク也

能乾タレハ久須根ヲヒキ張竹ヨ

リハスシ

張竹長サ八尺二三寸計也或ハ張ニカケスシテ重シ釣ニシタルモ可ナリ

上下ノ仕掛中関マテモスルナリ

祐方云張竹ニ張タルマ、上

下ノ仕掛スルモ可ナリ

其寸法大概ヲ云時ハ上仕掛七寸五

分本仕掛三寸麻ヲヨリカエスナリ休弦一寸五

分三ツ伏ノ積也

中仕掛三寸五分上ノ仕掛キワヨリ下

ノ仕掛キワマテノ間六尺一二寸計ニスル

右ノ寸何

レモ金尺ノ寸定ナリ尤當時ハ七尺三寸銚ノ弓
専ラ用ル故ニ其寸合相應ニス此余考ヘテヨキ

ホトニ但シ是ハ小的弦ノ寸法ナリ又指矢弦遠

的弦ニ至テハ上中下ノ仕掛トモニ短ク堅クス

ルモノ也

遠的弦ノ寸上仕掛三寸五分或
四寸計本仕掛ハ是ヲ半ニスル

指矢弦

ハ遠的弦ヨリハ少シ短スヘシ又間近物或ハ我

力ニ強キ弓射ニハ中関ヲ和カニスル或ハ遠間

吾手ニ入タル弓射時ハ中関ヲ堅クスルナト云

類ハ鎖細ノ論ナリ又弦衣ハ何ニテモスヘシ定

リナシ

祐方云先生ノ弓式辨ニ一貫曰弓弦上下
ノ輪ノ表ヲ卷物ヲ弦衣ト云事ハ通称ナ

リ本文ノ祐弓方云逸見右ハ色々アリト云又源平両
 家弓矢昌ノ以来色々ト云ハ何ノ本拋
 アリテ記セシニヤ覺束ナシ右ト云ハ何ノ代ノ
 事ニヤ全躰何色ノ弦衣ヲ用タリ_レ可ナラ_レンカ
 但シ時宣ニ應シテ難ナキ物ヲ可用者ナリ何ニ
 テモ其利用可_レ調事也又朱前寺紙ヨ_レ當時ハ来
 ト云當時トハ何ノ頃ノ事ニヤ其年月モ不記ハ
 難知此朱前寺紙ト云物ハ如何ノ物ニヤ不詳源
 平盛衰記ニ白薄様原染紫ト見ヘタル類ニテ
 彼朱前寺ハ朱染紙ト云事ノ轉セルモノカサラ
 ハ今當緋唐紙杯云物ノ如ク朱色ニ染ナセル紙
 ニテアリ又ヘケンカ又岡本記ニ弦サイテニハ
 文ノアル物ヲハスマシキ事也紫ナトニ掛シ口
 ウ義ニ非スト見ユ此記ニ拋ル時ハ紋アル絹ニ
 テハセマシキナリサイトハ裂出ニテ絹ヲ引裂
 タル切ノ各ナリ岡本記ノ説ニヨレハ何ニテモ
 模様ノ切ナキ絹ニテ弦衣ヲ可_レ爲事ニソ_レ今世此物
 ノ定制アリヌル事未_レ聞_レ之又塗弦ニ此絹ヲ用事
 ナシ但シ吾弓術ノ師傳ニハ塗弦下地射シメ弦
 ニハ此弦衣ヲ必ス用テ其表ヲ漆ニ塗事常射ノ

弦ト相同ナリ此射馴弦ニハ下地ヨリ心得有テ
制作セルナリ一家ノ習トセリ勿論此弦衣ハ紙
ヲハ不用必ス絹ヲ用ル事也委ハ別記ニ贅シテ
爰ニ畧ス右朱前寺紙ノ説ハ不詳故ニ漫ニ臚説
ヲ述テ階梯トス能知ツラン人ニ可尋ト記サレ
タリ此弓式辨ハ先生ノ老年ノ作ニテ其説勝タ
リ此常射ノ巻ハ先生ノ壯年ノ作ト見ヘテ
其説天地ノ隔アル事モアリナン見者可心用又

近世弦ノ上仕掛ニ音金

ヒ、キ
カネ、ヒ

トテ銅又ハ鉛ナ

ト巻込テ弦音ヲモトムル輩アリ是等ハ實事ヲ

取失タル事ニテ耻ヘキ義ナリ

音金入タルハ弓
ノ額木ノ爲ニ悪

シ用ヘ
カラス。元來弦音ト云モノハ己力弓勢ニ有リ設

テ音ヲ發ル類ハ正路ノ弦音ニアラス則軍記等

ニ弦音高ク切テハナツナトノ文章思惟アルヘ

シ實事正路ノ弦音ト云モノハ喩ハ平原廣野ニ
風ノ響カコトク無形ニシテ勢逞ナル所ニ有ヲ
實ノ弦音ト云ヘシ意味言語ニ述カタシ猶勸善
之卷ニテ熟得スヘシ

晒弦

遺稿曰晒弦ト云モノハ麻苧ヲエコノ油實みヲ取
タル跡ノ莖くきヲ焼テ其灰ヲ取テ麻ヲサラセハ方祐
云此灰ヲアリニ至テ色白クナルナリ此麻ヲ以
シテ晒スカ不詳テ指タル弦ナリ見物ニセルニハ觀美ナルト云
トモサラシタル麻ナレハ強ミノ性又ケテ甚タ

弱シ強弓ヲ好テハ用ヘカタキ弦ト知ヘシ

弦喰濕

遺稿曰弦ヲクヒシメスト云々右ヨリ有テ野史
ニモ見ヘシ所ナリ則射御之卷ニ弓ヲ張テ後ニ
ウラハスキハヨリ探ウラハノ方ヘ一尺計口ニテクヒ
シメシ扱ウラハ本筈ノキワヨリ探ノ方ヘ七八尺計ク
ヒシメシテ扱又探ノ上ヲ四五寸ノ程ヨリ探ノ
下ヘ三四寸クヒシメスモノ也扱左ノ手ヲハ握
ヲ持テ弓ヲ立膝ヲ付テ右ノ大指ト人サシ指ト
長高指ト三ツニテ末筈ノキワヨリ本筈ノキワ

マテシコキテ弦打二ツ三ツ仕モノ也又逸見ノ
書ニハ弦ヲカミシメスト云フ末筈ヲ拘ル者ノ
役ナリ下筈ハ張手カ又弦懸手ノ役ナリト見ヘ
タリ又高忠聞書ニ弓を張弦をくひしめすと云
亘末筈より先くひしめすへし末筈より本の方
へ三寸計喰しめし扱其口にて末筈の方へ喰し
めしす也外へしはつる也其後本筈の弦喰しめ
す也それも二三寸はかり先握の方して扱又弭
の方へしてさて止る也又射手搔副記に弦喰し
めす様弓を横になし末筈の方を左の方へなし

両方の手にて持先うら弭を下より上へ六寸は
かりくひしめす其後搜の下を六七寸はかり下
より上へ又上より下へ喰しめす也右の手にて
三度をしこきて置なり又弓馬故實に弓を食し
めす事はせよとなければ喰濕しめさぬもの也若喰
濕とあらは末弭のさくり本弭の方をくひしめ
すへし先末弭の方をしめす時は本弭の方より
末弭の方へ喰しめし扱本弭方へくひしめし又
末弭方へ喰濕也さくりも同じ扱本筈の際を末
弭の方より喰濕又本弭の方へしめす如此三度

宛くひしめすへし但二度つゝも不苦なりト見
へタリ此等ハ皆小笠原家ノ説ニテ尤本抛トス
へキモノナレト其義一定ノ事ナク孰ヲ是トシ
何ヲ非ト爲ンヤ案ニ弦ヲ喰濕ト云事ハ元來實
事ニテ弦ノ切所ヲ用心セルナリ則高忠聞書別
記ニ御主の所弓張にも同事也弦はそとくいし
めして参らする也若きらさる用意なりと見タ
リ此文意ニテモ知ヘシ或ハ其喰濕事ニ其寸尺
ヲ定メ作法ヲ設シハ彼案ノ流風ニテ是而已ニ
カキラス類例多シ是等ハ取捨シテ其弦ノ心モ

トナキ所ヲ喰濕ス事肝要ナリ既ニ異本太平記
笠置軍ノ篇ニ櫓ノ上矢間ノ陰ニハ射手ト覺シ
キ者トモ弓ノ弦クヒシメシ矢束解テ推クツロ
ケ中差ニ鼻油引テ待懸タリ又船上合戦ノ篇ニ
例ノ大弓弦クヒシメシ中差取テツカヒトアル
文義ニテ右烈士ノ實事ヲ可察者也

天胤煉様

遺稿曰久須根ト云モノ古代ハ用ヘサルニヤ延
喜式兵庫寮ニ弓造ル料物ヲ載タル中ニ弦桌ノ
事ハ出タレト久須根ノ名ハ見エス是古昔ノ弦

ハ皆漆弦ヲ用ヘタレハ久須根不可有クスネハ
白弦ホクレヲカタムルタメニ引タルモノナリ
中頃南蛮国ノ人天胤こうもりノ油ヲ弦ニヌリテ固ルノ
法ヲ傳フ是ニ後人巧作ヲ加テ松脂ニテ制タリ
故ニ文字モ天胤ト書テクスネトヨムナト、附
合ノ忘説用ヘカラス案スルニクスネハクスリ
ネリノ中下ヲ畧シテクスネト云ヒタルナラン
カ藥練ト書テクスネトモヨマセタリ可考又是
ヲ煉ニ習アリ生松脂女松ノ脂ヲ最上トスヲ焼
古クナリタル脂ハ悪
物ニテモ薄鍋ニテモ入炭火ニカケテ煮能トケ

タル時胡麻ノ油ヲヨキ程加ヘテトクトマセ松脂
ノ強弱ニヨリテ能マセリタレハ鉢ニテモ水ヲ
油ノ加減アリ
入置キ此煮タル松脂ヲ布ニテコシ水ニ落シ其
固リ加減ヲ見其上ニテ程合アシクハ火ノ上ニ
テアフリ指ニ胡麻ノ油ヲ少宛付テ和ラカニス
ルナリ又カタクスルニハ晒松脂ヲ粉ニシテ付
テ指ニテネリマセルナリ是ヲ小煉ヲスルト云
ナリ又鍋ニ湯ヲワカシ其中ニ茶椀ニ生松脂ヲ
入胡麻ノ油ヲサシ能々篋ニテマセ布ニテコシ
湯ノ中ニ入尤湯ノ冷暖ニカケン有湯サメタル時右ノ如ク

小煉ヲスルナリ
祐方云煮タル脂ヲ湯ノ中ニ入
レ湯サメタル時右ノ如小煉ヲ

スルト記シタルハイカ、先生ノ
覺へ違トモナランカ本ノ俣記置 余ハ己ニ試

テ自知スヘシ是等ノ類ニ定法ハトハアルヘカ
スト知ヘシ

一貫流射術常射之卷一終